

昭和二十四年

五七
十五日
發行
(每月一回・十五日發行)

(通第二二八号)

慈光

第二十卷
第五号

次

63.1.23 ② 他力の真義
(附)わが身の悪しさを苦にする人に
福島政雄(一)

愛書と求道
近角先生著「親鸞聖人の信仰」④
福島政雄(七)

63.1.20 ③ 当面の浄土教の課題
西元宗助(二)
善惡の物さし
柳瀬留治(三)
近江学園御巡幸の際の感話
藤井巖(四)

歎異鈔に導かれて
花田正夫(五)(六)(七)

他力の真義

近角常觀

今頃、他力という文字ほど誤解されたるはない。世間には自己に何等の定見を立てずして、他の成行に放任するを他力主義といふ。事もとより用語の誤謬（ごびゆう）に過ぎずといえども、他力なる文字が甚しく相違せる概念を人に与うるに至れるを思うべし。

又我等が宇宙自然の現象をはじめとして吾人周囲の事物を他力と思うものありといえども、これまた誤れるの甚だしきものといいつべし。

この誤解は哲學的にも、宗教的にも大いに世に行われつゝあるが如し。世人、或は自力と他力とは相互に対立するものなりといえる如き、世上のものは絶対他力なりなどいえるは、皆この誤解より出でたるものなり。

又他力というを中心て一個の理想の仏を形造りて、これを標準として奪闇し、又は仏を冥想して慰藉（いしや）するを意味するものあり、是他力と名づけらるる仏を仰ぐ点は前二者よりは正しきに近しといえども、真に他力に救わ

ものなり。

然らば真の他力とは如何。

曰く、如来の本願力これなり、念佛これなり、真宗これなり。

然らば本願、念佛、真宗の眞意義は如何、眞実の内容如何、其不可思議、力如何。これとくに襟を正しくし、耳をそばだてて聞かざるべからざる要点にして、且つこれを聞信するの一念、信樂開発（しんぎようかいほつ）広大勝解者（こうだいじようげしや）となり得る御力なり。

そもそも本願力不思議というは罪惡の衆生を摄受（しようじゆ）し、苦惱の群萌（ぐんもう）を救濟したまうの大慈大悲なり。我等あまりに如來の大悲に耳慣れたらが故にその不思議を不思議と信ぜざるなり、勿体なきことなり。

それ善なるものは救われ、悪しきものは退けらるるは常道なり、清らかなものは摂せられ、濁れるものは斥けられるは人情なり。しかるに選択本願は、特に愚痴無智のものを憐愍し、破戒無戒のもの称え安からんがための名号なり。超世（ちようせ）殊勝の弘誓（こうせい）といふは三学六度の行（ぎょう）の修し得ざるもの救濟したまうこと、三世の諸仏に超え、十方の菩薩に勝れたまえり。

若しこれを我等人生生活の上について言わば、我等悪しきものに向つて、その悪を知るしめして、これを見捨てた

れたるにあらずして、他力をただ仮想（かそう）したるものなり。されば眞の力を感ずることなし、定散（じょうざん）自力の心これなり、されば他力の中の自力と名づけらるる所以なり。真宗の信者、口に他力を叫びつつ、他力なり、他力なりと仮想しつつ喜べるもの多し、よくよく自ら顧みざるべからず。

然らば眞の他力とは如何、眞實他力の信心とは如何？

親鸞聖人、行巻に曰く「他力といふは如來の本願力也」と、又歎異鉢には「本願他力真宗」といふ、「本願他力念佛宗」という。如何にも莊重なる語氣、おごそかなる用語を繰返さる所以のものは、たしかにこれに応すべき内容のあればなり。

されど近代の他力を叫ぶものはなほだ軽くして畢竟（ひつきよう）現在生活のままをもって他力といい、宇宙現象のままを他力なりといふ、これ畢竟他力なりと解するものなり、他力なりと想えるものなり、他力なりと押しつける

まわざる大悲に遇（あ）わば如何。我等苦多きものに對して、其苦を融かすまで我等を照らしたまう大悲に遇わば如何。

無碍光（むがいこう）の利益より 威徳廣大の信をえて

かならず煩惱の水とけ すなわち菩提の水となる

罪障功德の体となる 水と水のごとくにて

水おおきに水おおし さわり多きに徳多し

悪しきを憐れみ、罪を捨てざる大悲大願は、まことに不可思議と云わんか、難思議と云わんか、我等三毒五逆の輩もかくまでも悲憫したまう大悲に遇いたてまつりてこそ真心徹到し、円融無碍の利益に遇いたてまつるなれ、これ実に如來の本願力なり、大悲のやるせなき親心なり。これ他力の眞意義なり。念佛成仏是真宗の御力なり。南無阿彌陀佛。

罪惡を見捨てざる慈悲、これ眞の他力なり。然るにややもすれば、罪惡と慈悲と出違いになれるよう考へらるるものあり。曰く、我等は罪惡なり、その罪惡のものに恵みを与えたまうこれ慈悲なりと。かくの如く我等の罪惡に加うるに如來の慈悲をもつてしたまう、ますますお恵みに対して申しわけなし。これあだかも借金の義務を果たさざるにお借金を加うるが如し、益々恐れおののかざるを得ざるなり。これ罪惡を見捨てざる慈悲にあらず、罪惡をかえ

り見ずして慈悲を加うるなり、罪悪を燐むの慈悲に非ずして、罪惡にかかわらずして慈悲を蒙らしむるなり、これ慈悲が罪惡と行き違ひになれるなり、これにては慈悲は單に恩恵にして罪惡を憐むの慈悲に非さればなり。ややもすれば病める人、出離（しゆつり）の一大事につきて如來の慈悲をいただかずして、唯日常生活的恩恵を喜びつつなお安心し得ざるものあり、これ單に日常的生活の恩恵を感じて如來の慈悲は、煩惱具足、火宅無常の我等を憐みたまう慈悲たることを感ぜざればなり。金を貸すことの恩恵のみありて借金を憐みてこれに救与したまうの恩恵を受けざればなり。

如來の恩恵は罪、見捨てざる御慈悲なり、如來の救濟は我等が罪惡を憐愍したまうの御心なり。我等はかくまでも我等の罪を憐みたまう甚重の大悲を感じて初めてその苦を救わるなり。かくまで我等を了解したまうの大悲に遇いたてまつりて心を安んずべきなり、かくまで我等が罪惡のために大悲を煩わしたてまつれることを慚愧したてまつるべきなり。

されどもし、我等が罪をそのままにして、単にこれに加うるに恩恵を加えらるるならば、我等は益々恩恵の深さに堪えざらんとすべし。これ罪惡を悲憫したまう慈悲にあらずして、罪惡と出違ひになれる慈悲なればなり。かくて如

ずして全快するまで治療したまうなり。

「如來は一切の為に常に慈父母となりたまえり
當に知るべし諸の衆生は皆これ如來の子なり

世尊大慈悲、衆の為に苦行を修したまうこと、
人の鬼魅に著せられて狂乱所為多きがごとし」

かくまでも我等がために罪惡を見捨てず、我等がために心を悩まし、我等がために五劫の思惟をなしたまい、我等がために永劫の修行をなしたまい、我等がために正覚を成じたまいて、我を待ちかねたまう御親心、これ他力なり、これ願力なり、これ大慈悲力なり、大誓願力なり、今日阿彌陀の自在神力なり、光明攝取衆生力なり、

十方微塵世界の念佛の衆生をみそなわし

攝取してすてざれば 阿彌陀となづけたてまつる

これ他力なり、これ如來の力なり。この力に乗じてこそ

初めて心を安んじ、また我等が罪業の深重を感じるなり、この力に乗じてこそ罪業深重の我等安々と救わるを得べきなり。むべなるかな、龍樹菩薩が水道の乗船にたとえ、善導大師が無疑無慮乘彼願力（疑いなくおもんばかりなく彼の願力に乗す）と述べたまうこと、

阿彌陀、餽音、大勢至、大願の船に乗じてそ

生死のうみにうかみつつ 有情をよぼうてのせたまう
生死大海の船筏なり、罪障おもしとなげかざれ。かくま

何に他力を説き、他力を聞くといえども、眞の他力の意味を味わうことあたわす。

眞の他力といふは、仏願の生起本末（しようきほんまつ）は我等の罪惡甚重たることが、そもそも大悲の起る淵源にして、その罪惡の甚重を見捨てざる御慈悲が、今日阿彌陀の自在神力（じざいじんりき）たることを知りたるが眞の他力を知れるなり。この他力を知りてこそ我等の罪惡深重なるを重しとしたまわざる願力無窮を仰ぎたてまつるべきなり、散乱放逸を見捨てたまわざる仮智不思議を信じたてまつるべきなり、これ他力救濟の至極なり。

罪惡と救濟と出違いとなることが單に恩恵の重きに堪えざらしむるのみならず、又罪惡に対し放任無責任の感を抱かしむるにいたる。俗に、罪はかまわぬと云い、そのまといい、罪ありてもよいという、責任を煩惱という、いずれもいまだ我等が罪惡を悲憫したまうの大悲に飽足（ほうそく）せざるすがたなり。

如來は我等が罪ありてもよしとのたまうにあらず、罪惡の深きがために特に甚重の大悲大願を起したまうなり。親は子の病ありてもよしとあらず、親は子の放蕩をゆるすにあらず、親は子の不具を辛抱するにあらず、子の不具なるがために特に悲憫したまうなり、子の放蕩のために深く心を悩ましたまうなり、子の病のために飽くまで見捨てつべし。

でも我等が罪を憐れみ見捨てたまわぬ御力なり。この方に遇いたてまつらば、何人か空しく過ぐることのあるべき、聞信（もんしん）の一急にすみやかに功德の大宝海を満足するなり。破闇満願の徳、これ如來の我等が闇を破りたまう光明の徳なり、我等が罪業の欠陥を満足せしめたまう親心の力なり。

「大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに、衆禍の波転ず、即ち無明の闇を破り、速に無量光明土に到りて、大般涅槃（だいはんねはん）を証し、普賢（ふげん）の徳に遵（したが）うなり」と他力救濟の風光実に不可称、不可説、不可思議といい

つべし。

聖道門のひとはみな 自力の心をむねとして

他力不思議に入りぬれば 義なきを義とすと信知せり
實に他力の至極は、義なきを義とし、様（よう）なきを様とす、如來の我等の罪業深重を見捨てずして悲憫したまう御はからいにはかられまつれば、我等のはからいなきなり。自然（じねん）といふも如來の御力によりておのずからしからしめたまうことなり。決して天地自然（へしそん）の意義にあらず、如來願力自然（じねん）の御はからいなり、法爾（ほうに）といふも如來の法の徳の故にしか

らしめらるるなり、決して眞如法爾（しんによほうに）の意味にあらず、我等が罪を消し失わしめたまう御徳のしからしめたまうなり。水の下に落つるは引力の力なり、烟の上にあがるは空氣の力なり、柿の甘きは秋の力なり、罪業

深重、地獄必定の我等、信の一念に身心悦予（えつよ）して横に五趣八難を超えて、現生（げんしよう）十種の益を得るもの、これ本願力のしからしむるところなり。五劫思惟、兆載永劫の大慈悲の力によればなり、大願業力自在神力に由ればなり

横截五悪趣

横ざまに五悪趣を截（き）り

惡趣自然閉

惡趣は自然に閉じて

昇道無窮極

道にのぼるに窮極なし

易往而無人

往き易くして人無し

其國不逆違

その国は逆違することなく

自然之所牽

自然にひくところである。

と、これ願力自然なり、本願力の牽くところなり、親心の然らしめたまうなり、弥陀大悲のはからわせたまうなり我等凡小の一点もはからいを要せず。聖人晩年の消息に常にのたまわく、他力には義なきを義とすと知るべきなりと南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

（求道第九卷第七号）

わが身の悪しさを苦にする人に

近角先生述

「如何程聞いても五分五分根性が止まらぬ」とて、五分五分根性より脱する能わざるに悶えて居らるる方がある。「聴いている間はよいが、家に帰れば忽ち五分五分根性が頭をもたげて来る」とて歎かる人がある。この方にも聞いて貰いたいことは、

信仰は何も五分五分根性を廃せよとのことで無いことである。如來のお慈悲は、腹を立つのを改めよとの仰せではない、否その五分五分の如何につとめても止まらざる点に無限の同情を持つて下さるが如來である。無限の眞実をあびせて下さるが如來である。

兎角私共は、自分の心がいかぬということに目がつけばそれを直し度い念が先になつて、それに向つての眞実同情の仰せの方は、耳に入らぬという傾向がある。むしろ問題は、自分の心の直る直らぬに在るのでない、其に直らざる悪心に向つて、飽くまで同情し、飽くまで悲憐を加えて下さる大悲眞実の仰せの方にある。

試みに考えて見るがよい、自分ながら愛想の尽き果てた

雪山のオーム

（ヘジヤータカ物語）

醜惡見るに忍びざる私共の心である。すでに自分ながら愛想のつきている心に、如來は飽くまでこの心を醜惡としたまわぬばかりでなく、その心の故に、我は飽迄汝と共に在る、その心の故に離れて去るに忍びぬとの仰せである。自分すらイヤでたまらぬ心を、仏は飽くまでイヤとしたまわぬということは、唯言葉で言えばそれまでであるけれどもよくよく考えて見れば軽いことではない。唯口先で如來はそう言うて下さるのだとと思うだけであつてはならぬ。

この醜惡の私に向つて、如來の方よりは、斯くしてまで

も近づき、立入らずに居られぬとある如來の御眞実の方に

目をつけなくてはならぬ。そもそも如來は何の故にかくま

でやさしく仰言つて下さらねばならぬのであろう、かくま

で我を慈育したまわねばならぬのであろう。それが即ち本願不思議の親心である。大悲矜哀（こうあい）の御眞實にてましますのである。

返す／＼も問題は、自分の心の悪の止まさる点にあるのではない。止まさる悪のためには（と）くより呼びかけ、待ちかねさせ給える本願不思議の招換の方にあるのである。

（求道十二卷、二号）

「あなたの施しの心はもうなくなつたのでしょうか。私が、もうどうすることも出来なくなりました……」
はあなたのお蔭で盲目の父母に孝養をし続けてきました。これを聞いた農夫はオームの孝心に感激して彼の田畠にある果実と穀類を自由にしてよいとの許しをあたえました。

愛書と求道

近角師著 「親鸞聖人の信仰」 ④

福島政雄

積尊の成道は、八万四千の煩惱を退治して八万四千の光明を放ち給うたのであると言わわれているが、我等もまた如來の光明が届いて下されて、信仰開発して暗い胸が仏陀の恵みに解け来つた一念、夜明けたるところは云うべからざる大なる一念である。これは客観的に見ずに、各自の心中で深く味わつて見なければわからない。近角師の経験では、左に求め右に衝(つ)き当たり、少しも安心がなかつたのが、遂に仏の恵みの尊いことが頂かれて、一点ああ広大の慈悲が有難いと感ずる瞬間が即ち一念である。これを親鸞聖人は信樂開發(しんぎょうかいほつ)の時刻の極促(こくそく)と云われてある。この一念の味わいを横超(おうちょう)と言わられてある。近角師は次のように述べられる。

そもそも横超というは、堅出(じゆしゆつ)、横出、堅超(じゆちょう)、横超と相並んで、親鸞聖人が一代仏教を

る。我等の信仰は此の心これ仏と力むにあらざれば「堅」にあらず、向うから仏の恵みが照らして下さるから「横」である。故に横超という。

堅超といふは真言宗、禪宗などが盛んに凡夫地から一躍して、仏地に到ると説いて、即心是仏、即心成仏と談じそれは超であるが堅と云わねばならぬ。

次に念佛の功を積み、漸々修行を重ねて往生するという方は、横であつても出と云わねばならぬ。今他力の信仰は、一念仏陀の光を見るなり、仏になると定まるが故に横超といふのである。世人やもすれば、即心成仏の道は痛快であると考えて試みるものあるも、眞面目に悟ることは實際には頗る難しいことである。また横の教でも我々は仏を手本にし理想にしたり、または仮説したりして修養的に行かんとする道も、終には倒れざるを得ざる道である。親鸞聖人の教えられたるところは、一足飛びに横に超える道である。此の如き横堅超出の教判は、親鸞聖人の実験から来たるものにして如何にも適切の教判である。

右のとおりであるから、横超といふのは無限の仏が無限の力をもつて仏陀の境にひき入れて下さる願力攝取の法である。聖人は教行信証の信卷に「大願清淨の報土には品位

判积(はんじやく)するに用いられている名称である。堅といふは此の人生にありて、此の肉体のままで仏陀大覚の位に登る道である。横といふは此の人生以外の極楽世界に生れて、彼の国において仏陀によりて救われるが一つ云えば、我心以外に仏を見ず、我直に仏なりと自覚自悟(じかくじご)するが「堅」の方である。向うに仏陀が在(おわ)して我々がその仏陀によりて救われるが「横」の方である。我等は自分の煩惱を清めて仏位に登るという堅の道では到底駄目である。此の身を捨てて仏陀の御許に往く横の道が我等に相応したる法である。聖人の教判(きょうはん)は仏説の順序から出たのでもなく、また法門の理窟から論じ出したでもなく、全く聖人の実驗的信仰の味である。「出」というのは漸々(ぜんぜん)仏になるのをいつのであって、我々が修養の功を積んでそろそろと仏位に到るのが堅である。他の仏を念じて漸々に善くなつて淨土に往生するのは横、出であります。階次を云わず、一念須叟(すゆ)の間に速に疾く無上正真道(むじょうしょうしんとう)を超証(ちようしょう)すと云われてあるのを師は引用して、ああ有難いと親の恵みに氣附く一念に、親心が満ちて來たのである。信仰はこれより外にはないと述べて居られる。

次に師は「醍醐の妙味」という題で述べて居られる。醍醐というのは、牛乳より酪(らく)を出し、酪より生酥(しようそ)、熟酥を出し最後に醍醐を出すということが涅槃經にあると云われてゐる。これについて師は次のように述べて居られる。

さて其の涅槃といふ味を如何にして味わうか、前に云いし一念横超といふはこれである。親鸞聖人は正信偈において居られる。

「能し一念喜愛の心を発しぬれば
煩惱を断ぜずして涅槃を得。
凡聖逆誦者しく廻入すれば、

衆水の海に入つて一味なるが如し」

といふことである。仏陀の御恵みを得れば煩惱を断ぜずして涅槃を得る。このことは凡夫聖者の別なく、齊しく頂くことの出来る利益である。涅槃經に、譬えれば人七子

あらんに、母の愛平等なれども、罪あるものにおいて心

ひとえに重しとある。これによつてこれを見るに、涅槃經の五味の喻えは全く仏教の精髄は涅槃であるということを喻えたものと云うて不可無しと信する。

さてこの涅槃經の醍醐味を近角師はどんなところに味わつておられるかと、阿闍世王の入信のことにおいて味わつておられる。そして師自身阿闍世同様のものであると告白せられる。阿闍世は父王頻婆沙羅（ひんぱしゃら）を牢獄に入れて死せしめ、母韋提希夫人を七重の奥の間に閉じこめたのであるが、その後深く後悔し、耆婆（ぎば）大臣に勧められ、亡き父の空中の声に励まされて釈尊の許に行き、釈尊の慈愛深い言葉に感じて心機一転、全くちがつた人間になるのである。信心の人になるのであるが、その信心は無根（むこん）の信心であると言つて、阿闍世は不思議と驚歎し、未曾有と喜ばざるを得ない。これにて師は次のように述べられる。

愛子に対する慈父母たる如来は如何にあるかは、此の阿闍世が信仰に入った事実で明了である。かほどの惡逆のものを助くる如来の大慈悲を示すために、阿闍世の大狂亂を起して御恵みを注いで下さるのが仏陀世尊である。

の南方仏教では涅槃とは、この心が諸々の境界因縁の風に煽（あお）られるのが止んで、静寂に帰したところであると云っているそうである。それで近角師は左のとおりに考えを述べて居られる。

・ 本来仏の涅槃の意義は、釈尊が彼の三迦葉（さんかしよ）に対しての説法にても明らかである。彼等が火に事（つか）え火を拂するを教化し給わんとて、直にそこにある火を持ち來って、汝等の心には欲の火が燃えつつあり、目にも欲火燃えおれり、耳においても鼻口においても、触るものにおいても、欲の火が燃えつつあるに非ずや、汝等は欲火のために苦しみつつあり、其の欲火の減するところこそに平和あり、そこが涅槃であると説き諭された。此の如く仏の説き給う仏陀慈愛の靈水を受けて、自己心中の欲火を消して、同じく涅槃の妙味を得たるが眞の仏弟子である。然るに多くの仏弟子中にはこの仏の説法をば律法的に受けて、欲を起してはならぬ見たいものを見てはならぬ、此の世のものは皆嫌わねばならぬと偏執して、大に仏陀の教意を失うに至つたのでこれを他から貶（おと）しめて小乗教徒と云うたのであるう。

・ 本来釈尊の教えは、不足勝なる人間の心中に大平和を

否、阿闍世自身が罪悪救済を示した大聖である。

印度の昔日のみならず、今日の我々が広大の佛力を知りて、日夜に佛の恵みを喜ぶは皆仏陀廣大不思議の御力の致すところである。日夜無明煩惱に惑溺迷惑せる我等が、因らず心中に大安心大平和を与えられ、智愚善惡貴賤老子の別なく、齊しく此の如き大利益を得させて頂くとは如何にも広大なることである。親鸞聖人此の事実について非常の感激をもつて宣言したまわく。

「是を以て今大聖の真説に拠（よ）るに、難化（なんけ）の三機、難治の三病は大悲の弘誓をたのみ、利他の信海に歸すればこれを怜哀しこれを憐憫して療し給えり。喻えば醍醐の妙薬の一切の病を療するが如し。濁世の庶類（しょるい）穢惡（えあく）の群生、金剛不壞の真心を求念すべし。本願醍醐の妙薬を求念すべきなり（まさ）」に知るべし」

次に「無為涅槃（むいねはん）」ということについて述べられている。仏教の涅槃といふことを、虚無である、寂滅である、身も亡び心も滅するのが仏教の目的であるなどと西洋の学者も考えているが、これは誤りである。小乗の教徒が涅槃は灰身滅智（けしんめつち）、身心都滅（しんしんとめつ）であると云うているのも間違いである。今日

來らしめ、大慈悲の溢れて来る、即ち信心歡喜の実験の披瀝である。彼の阿含經（あごんきょう）の説を見るに此の状態が十分にあるのである。また釈尊既に成道して彼の五比丘に遇い給うとき、「汝等よ我を友よ友よと呼ぶなれ、我はタタアガタリで即ち如來である」と云われた。ここに既に如來がある。涅槃平和の境がある。小乗教徒は釈尊の教を律法的に受取つたが、大乗教徒は涅槃を積極的に解釈して、涅槃は常樂である。彼の小乗の徒は淨樂我常（じょうらくがじょう）を、四転倒（へしてんとう）と嫌い捨てて一切何物も滅無なるが、涅槃であるというは大に仏意を失えるものである。眞の涅槃は煩惱の火の滅したるところで、そこに如來常住の光明があらわれ、大我があらわれ、大樂の境界が開け来るのであると云うに至つたのである。要するに涅槃を律法的に化石したのが小乗である。それを実驗的に破り来つたのが大乗である。

以上は、近角師の一念横超と醍醐妙味と無為涅槃についての所説を抄録したのである。

（昭和四十一年十一月二十日稿了）

当面の淨土教の課題

西元宗助

われわれは、この世が、この世界が、ほんとうの現実であると思つてゐる。そして、この私は、この現実に執着して、あくせくとイライラしながら毎日を送りかつて迎えてゐる。しかし、この世は、ほんとうの実在なのであろうか。昨年はアメリカからカナダから、飛び廻つた。帰国すればするで、たくさんの用件と心配ごとが待ちかまえていて、そして思はず、この世は夢か現（うつつ）か幻（まぼろし）かと、いくたびか、つぶやいた。そしてそうつぶやいてみて、幻（まぼろし）という言葉のうえにお淨土を感じすることであった。

われわれにとつては幻のごとくにしか見えないもの、

その幻のごとくにしか思えないものこそが、じつは、この現実をささえ、この苦惱の群生海をささえている眞實在一淨土であることが想われて、ほの温い光が、この身をもつつんでいることが感じられて、ありがたいなと思うことである。

な生命保険と、このように心得ております。したがつてすこしも矛盾のないどころかと、答えなさる。

わたしは、思わずうなつた。仏教を、眞実を、このように理解し受けとつてゐる人々がいる。そして、それは、この方だけではなく、現代の多くの日本人がそうであるかも知れんと、思ひいたたとき、あらためて深く考えさせられた。

わたしが、あまり情気なさそうな顔をして、黙つてしまつたものであるから、この方は弁解するように「仏教の日本は、たしかに有難いことが書いてあるんだと思うのですが、むつかしく無学なわたしには珍ぶんかんでございます。それにくらべると、生長の家の本は、振假名（ふりかな）つきでわかりやすく、わしらでも読むことができる。それに読むだけでも大変ご利益があるそうで」とおつしやる。

わたしは、これほどショックをうけたことはあまりない考え方せられたこともない。お念佛も、おさい錢も、お淨土参りのための、いわば保険の掛け金のようなものだと、じつにあつさりといわれてみて、さすがにアメリカだなあと、カンシンしながら、沈思反省せざるをえなかつた。

この沈思は、日本に帰つてからも深まるばかり。というのは、帰國そぞう、友人のお坊さまに、この話をして

アメリカの日本人のあいだでは、仏教がさかんで、たしかにアメリカでは仏教が生きているというのと、わたくしの感想であつた。そしてこの感歎は、今日と雖も、かわることはない。しかし、ある問題がないわけではない。殊にあるとき、篤実な仏教徒といわれているA氏の宅にとめていただいたところ、その居間には「生長の家」のカレンダーと雑誌がある。はてナと思って、お宅は、生長の家とも関係がおありなのですかと、うかがつてみると、生長の家のほうもと、おっしゃる。この方が仏教の有力な幹部であることは間違いない。げんに立派なお仏壇があつて、その仏壇の下箱にはお経の本もある。それで私、おもわず、あなたは仏教信者で、そして同時に生長の家。それで矛盾はおありになりませんかと、たずねてみると、この世の生活の幸せのことや道徳のこととは、生長の家から。仏教（淨土真宗）からは、あの世の極楽参りの安心を教えて、たたいておりますワケで、まあ、いうてみたら、仏教は精神的

みたところ、その友のいうのには、自分のところの門徒にも、そのようなものがいる、しかも眞面目なものがそなへで困つてゐる。とおっしゃる。なんでもその仏婦の役員さんはモーラロジー（道徳科学会）の信者でもあるとのこと。

そこで、そんな人を幹部にするとは、もつてのほかとうと、友のショゲでいうのには、ところが彼女は、じつにお寺のことに熱心で、しかも人柄もよく、みんなの信望もある。それで、そうかんたんにやめさせるワケにはいかんとのこと。

仏教ことに淨土真宗について、現代とくに考えなければならぬ問題は何かということが、以上のことによつて、あらためて考えさせられる。いろいろ問題はあるが、問題にせねばならぬことの一つは、淨土ということの意味をはつきりさせること。そのことは、仏教と道徳の問題である。そしてそのいすれもが、まことの信心ということに深くかかわっているだけにきわめて重大な問題であることが痛感させられる。

淨土といえば、現代の多くの人々にとつては、仮空のごとくに思えるのであろう。たとえ仮空でないとしても、死んでからのあの世のことであつて、われわれのこの現実と

は、なんの関係もないよう考へられている。だから生長の家などで、心のもちかた次第では、この世が淨土であるといわれれば、そのほうがはるかにわかるような氣にもなる。しかし、いうまでもなく、心のもちかた次第という、そのことにまず問題があろう。どう心のもちかたをかえてみても、この世を淨土といえるか、どうか。これらアメリカの人々に云つてみた。ベトナム戦争や黒人騒動があり、毎日毎日交通事故の死亡者や離婚者があり病死者があつてそしてお互ひ煩惱をもやしてて、それでもなお、この世を淨土といえますかと。それにつけても思はせられることは、親鸞の「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は」というお言葉である。

われわれ現代人は、喧噪たる日常のことに埋没してしまつて、正常な感覚をうしないかけているのでないか。この文のはじめにのべたように、われわれの現実現実といつているテレビ的世界は、じつは、夢か現か幻かであろう。そして、彼岸こそが、淨土こそが、却つてこの現実をささえているところの真実在なのである。そのことをはつきりさせること、即ち今げんに、その淨土の光に照らされること即ち眞実の言葉でいえば、現生正定聚（げんしようしよじょうじゆ）ということのもつ意味をあきらかにすること実の自己の生かされてあるということを明らかにすること

すとも萩のはら」（曾良の句）を口ずさんだとき、南無阿弥陀仏と私はたちあがつた。真に未来に安心するが故に、現在に安慰（あんじよ）とありうることを知つた。されば又、過去を顧みて感謝のできる喜びのあることも知らされた。まことに淨土の教えによつて、過去と現在と未来を通ずる三世の救いをこうむりえたる喜悦を、俘虜の境涯において悲しみのうちにも知らされたのであつた。

○ ○ ○

次に第二の、仏教と道徳の問題であるが、これも亦、わたくしにとって、わが後半生の最大の課題になつていくようと思われる。もちろん公式的には、いかようで、もいうことはできる。しかし、ほんとうに我が身を納得させる即ち現代の大衆に納得させるためには、さきの「」の問題にしても、この「」の問題にあって、私自身が後半生をかけてあらためて行証していかなければならぬことを痛感する。

そもそもわたくしは、親鸞聖人によって、仏教の根源精神を如何ように受領しているかといふは、汝、無上正眞の道を求めてやまざれということである。これを現代風にい

が現代において特に肝要であると切に思うことである。しかしそれにしても、死んでから救われるのではない、本願を信じて念佛するところに現にお助けがあり、即得往生であるということを、現代の言葉で、どのように明らかにすればよいか。

わたしは、あるとき次のようにもいつてみた。この世は娑婆世界であつて、どのように心のもち方をかえてみてもこの世は淨土ではない。しかし、淨土の門は、この世に現実に開かれていると。

しかして、あの世にはお淨土はあるが、しかし、もはや淨土の門（人口）はない。だから、この世に生きている今のときにおいて、仏法は聞かなければならぬ。仏法を聞信して淨土の入口に一步しなければならない。すなわち信心を獲得するというは、身は娑婆界にありながら、心は今げんに淨土の入口に立たしていたたくということであると、そして、これを現生正定聚と申すのである。このようにも語り、自分にもいいきかせてみて、納得がいったが、その道の専門家からは、どのような批判があるのであろうか。

それはともかく、お蔭様で、私においては帰り行くべき淨土があたえられている。あれはシベリヤであった。绝望的な日々（俘虜生活）のうちにあつて「ゆきゆきて倒れ伏

うならば、汝、絶対の眞実を求めてやまざれということである。しかして、聖人は、この仏道を自己一身に真正直に受けとめて、苦勞せられたあげくのはて、「發菩提心いかがせん」と慚愧され、あるいは「自力かなわて流転せり」と歎けられたように、絶対の眞実を求めてやまぬが故に、その絶対眞実の光（如來）に帰依し照らされて、却つて虚偽不実と自照せられたのである。しかして、この虚偽不実この宿業の大地に、「されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを助けんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と如來の本願を仰いで、ただ念佛申されたのが親鸞の他力回向の信であると、このように私は領解している。

されば淨土真宗とは、聖人の仰せのように「本願を信じ念佛申す」ことにきわまり、その生活感情は、おのずからなにほどか感謝と慚愧の念のこもこもするものとなる。ここに感謝の念と慚愧の念のこもこもするというのは、眞実の感恩感謝の念のきわまるところ、おのずからわが身を省みては、慚愧の念となるから。しかし、慚愧の念のきわまるところは、このようなものを生かしてくださつてゐるかたへの、自らなる感謝となるべきものであるから。また事実、そういうものであるから。

しかして、この慚愧の念こそが、できるだけ身を慎しむ

という個人道德の根源力となるであろう。またこの感恩の念が、及ばずながら世のため人のため、できるだけのこととをさせていただきたいという社会道德実践の根源力となるであろう。それを歎異抄には「自然の理（ことわり）にて「とか」「自然の理にあいかなわば」と、いっておられるのではないか。もっとも、これらの点については、いま少し自らも考え、殊にその道の先生がたのご示教を仰ぎたいと切に思う。

○ ○

それにも、われわれは、又世人は、仏教の言葉に、あまりに狃り親しみすぎて、誤った受取り方をしていることが多いのではないか。

たとえば自力無効ということも、一生県命に努力してみて、はじめて自力無効というお言葉も背けるのではないか。しかも自力無効と知らされて、如来を仰ぐところから、却つてほんとうの力が湧いてくるのではないか。即ち浄土の大菩提心をいただいて、及ばずながら一生県命に仕事をやらせて頂く、そのことが自力無効ということではないか。

またあきらめというと消極的で駄目だと世人はいうが、そうではないであろう。ほんとに人生を諦め断念していくところから、自力無効と知らされるところから、ナンマンダブツと寂かに立っていく。そして出来るだけのことをさ

善 惡 の 物 さ し

柳 瀬 留 治

子供はよく喧嘩をする。その黒白を正しくつけようとする人がある。私の幼稚園でも幼児が屢々喧嘩をやる。その言い分を聞くと多くは他愛のない事柄である。そうかそんなことで喧嘩なぞするでないよ。何か面白いことをして遊ぼうと、頭を撫でてやるのである。

善惡の判断は大人も身勝手に決めていて、昨年暮まで神奈川新聞に徳川浪人伝が連載されていた。時は大阪夏の陣で豊臣側が敗れてから漸次に親方藩が徳川に潰されそれ等の家来の殆どが浪人になり、浪人が野盜をして生き延びていた。その野盜の言い分を聞くと城を攻め奪るを雄将といふ。富豪の財を奪うを賊といふ。小さな盗みは賊、大賊はさに非ずだといっている。今も人を殺すと悪とするが敵を殺すと功といっている。

民族も個人もその利害に立ちモラルの善惡を決めていれる。自我の功利打算に外ならない。

彼のカントは実践理性批判で至上命令といって、自我の

せていただく。そのことが、ほんとうの諦めということではないのか。なにか、このような大事なことが、われわれ仏教徒のあいだでも暗黙のうちに誤解されているのではないか。あれこれと、彼岸にありて想い、仏法の廣大にしてはるけきことを想うことである。

(おことわり) 教育新潮社の了解をえて「宗教」3月号所載の拙文の大部分を転載させていただいたのである。花田先生の御健康恢復を祈念しつつ。 西 元

一樹の蔭、一河の流ということがある、この出處は妙眼論の中である。

或は一国に坐し、或は一郡に住し、或は一村に処し、一樹の下に宿り、一河の流を汲む。一夜同宿、一所聴聞、暫時同道、半時戯笑、一言会釈、一坐飲食、同杯同酒。一時同車、同暁同坐、同休一臥。輕重の有無、親疎の別あれども、皆これ先世の縁なり。

袖振り合うも多生の縁というのもこうしたところから出た言葉であろうか。

△足利淨円師述▽

功利でなしに神の至上命令で止むに止まれずするのを善といつている。

佛教では善行でも自我に基き結果の利を予期するのは皆有為(うい)即ち迷いだ。我(が)を脱し無我になり得て無為無作になれるんだという。西田哲学の善の研究もそれを哲学的に解明したものようです。

人間も生物で自我意識により自らを衛(まも)るべくやらねば生きて行けない。それは各々の業(ごう)とよぶ。生細胞がそうなので、それによつて発する思惟行動の凡てがそうちらざるを得ない。だが他の動物と異り良心といふものを聊(いささ)か持ち、心の安定を保とうとしている。それが向上心を起こさせ救いの手がかりをなすのです前にいた子供のしたことの善い悪いを大人の見る以上に大人の善悪を高所即ち観者がどう見られるであろう。涅槃経の中に父王を殺し母を殺そうとした阿闍世王に対するお言葉が書いてある。即ち王は心の悩みから病を

発し懊惱している。臣達が当代の哲学者のいう無靈魂説や虚無説などを説いて慰めるが何の慰めとならず、眞情の侍

臣耆婆（きば）

の言に従い釈尊の許に伴われて行つた。恰

も臨終の迫る釈迦は「われ阿闍世のために涅槃に入らす」

と彼の来るのを待つていられて、王に云われるようは「汝

の父王は善根をし仏を供養した報いで王位に即いた。若し

王にしなかつたら汝が父王を殺すことはなかつた。汝が父

王を殺した責は汝のみかわれにあるのだ。それに汝は正氣

でしたのでなく、貪欲で気が狂つて犯したのだ。汝が狂つ

てした罪で悩乱したのを憐れで見るに堪えない。その罪は

われにあるのだ。われはその罪を負わずに居れない。凡

（すべ）て負うぞ」と仰せられた。王は釈尊に悩みを悉皆

（すつかり）受け入れられて、頓（とみ）に重荷がそれ、

心が喜びに溢れるのです。王の申すよう「昔から伊蘭（いらん）の種から、あの悪臭を放ち絶狂させる伊蘭樹が生じ

ると聞く、今私の伊蘭の種から香り高い栴檀樹（せんだんじゆ）の信が生じました。仏よ、この御憐みの一つあれば

たとえ地獄に墮ちて無量の苦を受けても何の苦とも思いま

せん」といった。釈尊は「王よ、よく判つてくれた、それ

でこそ全人類の悪心が救われる」とお喜びになつた一節があ

る。

善といつてもたよりない心の灯火で風が来たら消える。

近江学園御巡幸の際の感話

藤井

巖

近江学園の名は知らぬ人もあるまい、精神薄弱児の養護施設で、糸賀一雄、田村一二先生等が献身的につとめていられるのであるが、この田村先生が彦根湖東双行会の仏教

会で話して下さったことがある。

それは大東亜戦争が終りをつげて、国民の虚脱状態もほぼおさまり、人心も漸く落ちつきを取りもどした昭和二十六年十月十五、六日に天皇陛下が近江を巡幸せられ、大津から彦根へと廻られた際、私共も高野瀬の中仙道でお迎えした。

この朝、アメリカの占領軍が、私共の並んでいた家の軒端の日章旗を、ジープの上から引きぎつて行つたので、悲憤の思いにかられていたが、御車はゆるやかに、南から北へと進み、幸にして陛下の御姿も拝することができた。思いなしか、おやつれの御様子で、しわぶき一つ聞えない静かな静かな沿道の人垣の中を、慈愛に満ちたお眼をそそがせられた。「萬歳」の声も起らない。私はこみあげる涙

太陽の光の前はあわれな存在です。いかに悪の闇い心でもと思う自我の尺度からのことです。聖徳太子の憲法にも

夏の太陽に逢つたら明るくならざるを得ない。

善といふ惡というのも凡て迷いからのものです。正しい

「彼是なれば我非なり。我必ずしも聖に非ず。彼必ずしも愚に非す。共に是凡夫のみ」といわれている。是非善惡は

自我功利の尺度で立てるもので、自我から脱れ得て初めて

正しさの判るものです。

八短歌草原、冠頭言

常陸の旧蹟に親懼聖人を懇ぶ

常陸より何を縁に山越えて筑波山あひをとめ来ましけむ時の府の鎌倉の地に遠からぬ常陸をこそととめ来ましけむあらくれの鄙の人々思はざる聖の信に触れて泣きけむ裏筑波起き伏す山のひまびまを化導なさし姿目に見ゆ通ひましし山路といふや生ひかぶさり細々続く山たをのみかかる」かくぞ救はるいかならむ十惡五逆も漏るあらむやと

御性情熾烈なりけむ救はれし御喜びも熾烈なりけむ

ち

「短歌草原」より

をおさえて、遠ざかり行くお車を、念佛裡にお送りした。陛下は彦根のまえに石山の近江学園にお立ち寄りになつた、田村先生はこの時の事を次のように話された。

戦争が終つて間もない頃であるから、東京その他戦災都市には戦災によつて肉親を失い、衣食に窮した浮浪児が、上野駅構内や地下道に数多くたむろしていた。近江学園は精神薄弱児の施設ではあるが、こうした浮浪児たちも収容することになつた。こうした児達は戦争で父母を失い、戦災で家を焼かれなどしたので、陛下に対して敵意を抱いているものもあり、この学園にお迎えするなどはもつての外だと考えている、こうゆう少年に対し種々と説得して、心よくお迎えさすことは容易なわざではなかつた。然しどうにか、こうにか苦辛して説き伏せたけれど、いよいよ陛下の御車が学園近くにちかよつて来た時、二階の窓に腰かけて下を見降していた一人の少年が

「オーケイ、天公が来たぞう！」

と大声あげて叫んだ。「天公」などとは思いもよらない言葉を吐いた。こんな調子では、万一不測の事でも起つては大変と、私共はあぶな相な少年の背後に立つて「いざ」という時の用心までしていた。

いよいよ陛下の御巡視が始まり、この二階の私共の部屋にもおはいりになつて収容児の間を静かに静かにお巡りになつた。

こういう場合、陛下は病院、学校、工場などでは、病人や生徒や工員たちに、親しくお言葉をおかけになり、夫々に慰めたり、励まされたり、或はおたずねになつたり、いろいろお見送られるのであるが、この時に限つて、陛下は一言もお言葉をおかけにならなかつた。ただ静かにお巡りなり、その一人一人に慈愛こもるまなざしをおそそぎになつた。ふかふかと頭を下げられ、思ひなしかお眼がうるんでいらっしゃるようすに拝せられた。

他の部屋のことはわからないが、この部屋の収容児はひつそりと静まり返つてゐた。かくて御巡幸も事なく終り、おかえりになつた。

お見送りした後、私は部屋にもどつて

「陛下をお迎えして、皆はどう思つたかね」

とたずねてみた。少年達は

歎異鈔に導かれて

花田正夫

つた。

私の人生は歎異鈔にはじまつたと云えば不思議に思われる方もあるが、私の身体は岡山の片田舎に生れたが、私の第二の人生は歎異鈔からはじまつたのである。

しかし私は歎異鈔をよく読んでそこからひらけたというのではなくに、私はそうした書が地上にあることさえも知らずに、ただ自分の力をたよつて西に東に彷徨しながら永遠なるまことは何処にとの幻想にかられて闇の沙漠をのたうちまわつていた。時には蜃氣楼のようなオワシンズを夢みてよろこんだこともあつたが、みな幻滅から幻滅に終つて途方に暮れていた時、伯父からこれを読めと云つて渡されたのが歎異鈔であった。伯父の確信にみちたすめにうながされて二階の一室にこもつて瞳をこらして読んだ。けれども仏教の講話を一度も聞いたこともない私、仏書の一冊も手にしたことのない私には正直なところほとんど解らぬものばかりであつたが、それでも数ヶ所が強く私の心を打

「お父さんみたいだった」

「そうだ！ そうだ！」

と嬉しそうに口々に云つた。私は「天公」と言つた少年に、とくに

「どうだつたか？」

と聞いてみると

「悪い事の出来るような人じやないよ。僕はあの眼を見て、誓いを立てたんだ」

あまりのことびっくりして私は

「どんな誓いだ」

「それは、僕はどんなことがあつても生れかわつてみせるのだ、と誓いを立てたんだ」と。

田村先生のお話を聞いて私共は深い感銘をうけた。戦災孤児のあの部屋で、陛下は何をお感じになつたことであるか。戦災孤児と知られた陛下のお心は、恐らく居ても立つても居られぬお心でおありだつたと思われる。こうした陛下の御慈愛がお姿にも御瞳にもあふれ、堅く閉ざされた戦災孤児の魂をよみがえらさせたものと信じられる。

昭和四三年一月二十日

私は長い年月、この鉢について、私の導かれていることなどを誌して有縁の方々に読んで頂いて、足らぬところは教えて頂き、何かの参考になるところがあればとつて頂いた。さればもつけの幸であると願っていた。しかし教の深さ広さを仰いでは、何時も門口で足踏みしてばかりいる自分、読みかじりでしかない身を省みさせられては筆を拋つていたところが六十四の春、はからずも悪性腫瘍と診断されたが、幸に初期とのことで自下治療をして頂いている始末であるが、これをきっかけに思いきつて、私の導かれていることどもを書きとめる決心がついて、床にあって筆を執りはじめた。

（昭和四十三年三月十五日。稿。）

序

ひそかに愚案をめぐらして、ほぼ古今を勘（かんが）うるに、先師口伝の真信に異ることを歎き、後学相続の疑惑あることを思うに、幸に有縁（うえん）の知識によらずんばいかでか易行（いぎよう）の一門に入ることを得んや。全く自見（じけん）の覚悟をもつて他力の宗旨を乱すことなれ。よて故親鸞聖人御物語の趣、耳の底に留まるところいささかこれをしるす。ひとえに同心行者（ぎょうじや）の不審を散ぜんがためなり、云々。

一、歎異のこころ

として悲しまれるこころである。それは私にとつてはかけがえのない尊い救いのひかりである。

二、有縁の知識と易行の一門

先哲は広い海で盲の亀が浮木にあうよろこびをもつて我々が仏法にすぐわれる慶びをたとえられている。我々は善惡を知りとおす力もなく、眞実を見出す眼もない。西も東もわからずに広い海に漂う盲の亀同様の存在である。

そうした我々が眞実にあうことは、思いもかけないことであつて、この盲人を憐愍（れんみん）して下さるお方のお念力一つによるものである。そこに御縁のあるよい知識にめぐりあい導かれてはじめて眞実の門に入ることが出来る。

龍樹（りゆうじゅ）菩薩は大龍菩薩に導かれ、天親（てんじん）菩薩は無着（むちやく）菩薩に、曇鸞（どんらん）

大師は菩提流支三藏によられている。道綽（どうしゃく）禪師は曇鸞大師に、善導大師は道綽禪師に導かれ、日本の源信僧都と法然上人は善導大師を師とされ、わが親鸞聖人は法然上人を無二の有縁の師と仰がれている。

眞実なるものはひとりよがりを許さない、無我ならしめるものがある。孔子は「述べて作らず、集めて大成す」と教に対し無私なこころをのべ、エマーソンは「人が眞実なるものを見出すとき、われとして為す何ものもなく、唯

私は長い間この歎異の心と善惡沙汰、裁きの心とが判然としないで、これは聖人の仰せをとり違えた者を批判し、退ぞけるもののようにとつて頂いた。それというのも、自分は聖人を信用し、その教に立派に従つてゐる、という心得はあつたことによる。

すべて間違いといふものは、あとから氣づくもので、むしろ自分では立派にやつてゐるつもりでいる。ところが不図したことから自分が十一章以下の間違いを現していることの二つ三つが見つかってから、それまでは他人事であると思つてゐたことが皆自分自身の問題であつたと知らされ、唯円大徳の泣く泣く筆を染められたのもこの間違い止めの私一人のためであつたと氣づかされた。

限りなき歎異の涙、唯円のこころもしらで五十路すぎ行く。

とはその時の腰折であった。それから唯円大徳の歎異のこころは、異なるものはいかぬと捨てるのでもなく、また異なるもの仕方がないと放任するのでもなく、異なる者を如何にも無理ないことである可愛想であるとつみとかして下さる大慈大悲のこころであつたと知らされた。

この歎異のこころは聖人の御晩年の愚禿悲歎述懐和讃の

おこころそのままである。即ち慚愧心の発露で、自ら悪を愧じられると共に他をしてその悪におちることをわがこととする。本師源空いまさずば、このたびむなしくすぎなまし、真の知識にあうことはかたきがなかになおかたしと恩師への満腔の感謝の情を述べていられるが、唯円大徳も同様の感謝を聖人に持たれたことは言うまでもないことである。

さてここに易行とあることにはじめは色々考えさせられるが、易行とは、仏のお力による故に易行となるので、たとえば天馬に乗れば悠久と虚空を飛行出来るようなものである。元来、難行易行に分けられたのは龍樹菩薩にはじまる、自分ひとりの力をたのんで成仏しようとしためることの難しさに比して弥陀仏の本願の船にのせられて横さまに生死の大海上を渡つて光明の淨土に到達することのやすらかさをたたえられたものである。

生死の苦海はとりなし、久しく沈めるわれらをば
弥陀弘誓の船のみぞ、乗せてかならずわたしける

弘誓の船に乗るとは、弘誓を信ずることである。ここに難病を治する妙薬が出来ていても、それを信じて服薬しないならばむなしく終る。釈尊はじめとし世々に三国七高僧とあらわれたもうたよき知識は、凡夫の救われる道はこの弘誓の船ばかりぞと御身にかけてお勧め下され、そこから聖人をはじめとして念佛の師が次々とあらわれて下さつたので、我等もまた有縁の師におあい出来るのである。

三、自見の覚悟

我々は直接聞いたのだから間違はない、この眼で見たのだから確実だとよく云うけれど、同じ物を見、同じことを聞いても、その人の心の状態に左右されて間違い易いものである。琴の名師、宮城道雄氏の隨筆に「沢山はまぐりを貰つたので、親しい方にお裾分けしようとして、女中にはまぐりはお好きかどうかを電話でたずねさせた。すると女中はあまぐりと聞き違えてその旨を電話した。するとそれを取り継いだ向うの女中さんがあまうりと聞き違つて、あとで大笑いをした」とある。

これは一つの笑い話であるが、信仰上の大切なことも、聞く人、読む人の身びいきな偏見に禍いされてとんでもないひとりよがりに墮ち易いものである。蓮如上人の御一代聞書に、上人の法話を聴聞した四五人の弟子が、上人の前を退ぞいて互に語り合つてみると三人までが聞き違えて

む人の心の田に深く植えつけられて、やがて機縁が熟して花を開き実がのつてくるものである。聖人は仏智からあらわれる大悲の言葉にそうした働きを確信された上の字訓と思われる。

私は岡山の高校生の頃、池山先生から何かのことで「信仰の話」というものは一度聞いてさえおれば決して消えるものじやない、一時は忘れてしまつたようでも、何年かのうちに何かのはずみに、必ず大きくなはずによくなるものだ。それは竹の子に小さい傷をつけるようなものでその竹が大きくなるとその傷があきらかに現れてくるような趣きがある」

とお聞きしたことがある。現に学生時代に智識欲と好奇心から先生の歎異鈔のお話をきいた人達で、その頃はチップカンパンで終つていても、卒業して社会に出て色々の人生経験を重ねているうちに、フト歎異鈔の何處かが生きた言葉として心にひびいて来るようになり、再びこの鈔を手ばなせなくなつた多くの人々を知つてゐる。

近角常音先生のお言葉に

「あなた方はお慈悲が判らなくなり、消えたりなんかするけれども、近角が今まで話してきた言葉は絶対に消えぬものだということだけはおぼえておきなさい」

とあつたが、先生亡くなれていよいよこのお言葉が深く思

いたとある。聞いた上にもよく聞いて、ひとり合点におちぬよう何時も注意をおこたつてはならぬ。

我々は我慢が強い上に見栄張りがあつて、人から直してもらうことを恥辱とするが、これは蓮如上人の仰せのようにいつも人から直して貰うように心掛けたいものである。

四、耳の底にのくる言葉

聞いている間は非常に感激して手に汗を握り、涙も浮ぶようなことがあっても、月日と共に忘れられ跡かたもなくなるものばかりである。これに反して聞いている間はさほどにも感じないでいた言葉がその後になつて大きく強く心に浮かび出て生涯の指針としてのこるものがある。勿論そうした言語を聞く縁というものは人生の上でそう度々とあるものではないが、大なり小なりそうしたよい言葉を誰しも持ち合せるものである。

さて唯円大徳は聖人御滅後三十年近い日、聖人の御物語のうち深く心に刻まれたものをここに書き誌されたのであるが、こうした言葉というものは金言とも実語とも申すべきものである。

聖人は「実」という字訓に「かなならずものののみとなるをいう」とせられました。秋みのつた草木の種が何處に落ちたのか知れぬまま長い冬をすごして、やがて春光にうるおわされて芽萌えるように、実語といいうものは、聞く人、読む人出されると、菅田文子さんが述懐していられる。ここにも池山先生のこころと相通じるものがある。

思うに聖人の御晩年に親しく師事し、聖人のお口から隨時隨所に自然に流れ出た信味あふれる実語、金言を、唯円大徳は大切に耳にとどめて、よくもあざやかに書き遺して下さつたことである。

実に本鈔は、尽未來際（じんみらいさい）かけて無明の暗夜を照らし抜く大灯炬であり、人類に残された尊くも大いなる無尽の遺産である。

近角先生が、御晩年の病床にあって、

教行信証真宗存す

信界建現何ぞ狂奔を要せんや

歎異一篇後昆（こうこん）に伝う

思想險惡何ぞ論ずるに足らんや
と、御本書とこの鈔を讃仰し、満足していられるることはまことに力強くありがたい極みである。

（昭和四十三年四月十一日稿）

き

が

と

あ



であります。

ひとりでも行かねばならぬ旅なるを弥陀に

ひかれて行くぞ嬉しき

と、かつてお聞きしたみ声がひびいてまい

○毎月第一、二、三日曜、午后一時半、
市電、新郊通り一丁目下車。東へ入る、
一道会例会。

三筋目左入る二軒目。
お詫び

当分の間療養のために講話を休ませて戴
きます。 花田

「他力の真義」は最近、他力とか他力本願
という言葉の意味が、依頼心の代名詞のよ
うに乱用されますについて、親鸞聖人がお
使いになつた眞の他力の意味を近角先生の
お味わいからいただきたいと願いましたの
であります。

本号には私の病を心配して下さって、お
忙しい中から西元様が御寄稿下さいまし
た。ことに半ヶ年北美の仏教界の巡講の旅
を終えて、痛切に浄土教の当面の課題を考
えられて発表下さったものです。

「善惡の物さし」は久方振りに柳瀬様の
短歌草原誌の冠頭言からいただきました。
「近江学園御巡幸の際の感話」は藤井巖様
の御紹介で知らせて頂き、胸打たれるもの
があります。人の心は武力でも金力でも、
権力でもなく、ただ徳光の自然のうるおい
によってのみ心服せしめられる事実も尊く
知られました。

う風で、いつまでも浮き沈みの流転の
身を知らされます。こうした私に唯一の力
となりたのみとなつて下さるのは、かかる
私を全理解して下さるの方のましますこと
「歎異鈔に導かれて」の原稿はこれから力

のかぎり続けさせて頂きます、大方の御高
教をお願い申上げます。

御案内

定価 半年 二百五十円（送共）
一年 五百円（送共）

名古屋市南区駄上町二ノ八八
印 刷 人 吉野 穂志郎

電話八二二局七〇三七番
編集・発行人 花田 正夫
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
振替口座 名古屋市南区駄上町二ノ八八
発行所 慈光社 一〇四七〇番